

# 修了研究テーマから見た 日研生の日本に対する関心事と 日本研究へのアプローチ

—15 大学日研生の研究テーマ分析を基に—<sup>1</sup>

ルチラ パリハワダナ\*

## 要旨

本調査は、テキストマイニング手法を用いて 15 大学 969 名の日本語・日本文化研修留学生（日研究生）の修了研究テーマを分析することを通して、日研生の日本探究の切り口、関心を持つ学問分野及び日本研究へのアプローチを明らかにすることを目的としたものである。

高頻出語、共起ネットワーク、関連語、コロケーション統計や 2 成分間の対応分析を基に修了研究テーマを解析した結果、日研究生が取り組む主要研究分野として日本語、日本社会、日本文化、文学、教育が抽出された。日本語研究は、表現を対象に行われることが多く、アプローチとして母国語との対照研究が多いことが窺われた。更に、〈日本人〉とりわけ身近な〈大学生〉や〈若者〉は日本を探究する主たる切り口となっており、それらに対する日研究生の研究手法として意識調査が頻繁に用いられることも示された。その上、修了研究テーマにおける一つのトレンドとして〈女性〉〈翻訳〉〈方言〉が浮かび上がってきた。

本調査では、更に、国籍別、論文作成年度別、在籍大学別の特徴についても考察した。

【キーワード】日本語・日本文化研修留学生、修了研究、研究テーマ、日本研究、テキストマイニング

## 1. はじめに

国費留学生のカテゴリーの一つに、学部レベルの日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生と記す）がある。海外の大学の学部課程において日本語・日本文化に関わる分野を主専攻として学び、日本語能力試験 N2 レベル合格以上の日本語能力を有することが日研生の応募資格となっている。日研究生は母国大学に在籍しながら、日本の大学に 1 年間留学し、学習活動に取り組むことを通じて日本語及び日本事情・日本文化に対する理解向上を目指す<sup>2</sup>。2011 年度は 71 大学で受け入れプログラムが開設され、327 名の日研究生が日本で学習活動に励んだ<sup>3</sup>。

日研究生は大使館推薦、または大学推薦の選考過程を経て選抜された優秀な学生であり、日本と関わりのあるフィールドで将来活躍することが期待されている。日本語・日本文化に関する教育職・研究職に就く人材の育成もプログラムに期待されている役割の一つである<sup>4</sup>。このような学生層の

\* 京都大学国際高等教育院

育成を目指してそれぞれの受け入れ大学で様々なカリキュラムが編成されているが、その重要な一環を成すのは日本研究である<sup>5</sup>。

日研究生は学部課程の2年次を修了した段階で日本に留学することが多い。故に、修了研究論文は、まだ論文作成の経験を有さない、あるいは少ない学生が外国語である日本語を駆使しながら、様々な困難を乗り越えてまとめた貴重な学習記録である。この日研究生という日本語・日本文化を主専攻として選び、日本と関わりのある未来を歩むことを自ら選択した学生層は<sup>6</sup>いかなる観点からどのように日本を探究したのか、日本のどのような側面に関心を抱いているのか、本調査では修了研究論文の題目を手掛かりにその解明を試みる。

## 2. 本調査の目的と実施方法

本調査の実施目的は、修了研究テーマを分析することを通して、日研究生の日本探究の切り口、関心を持つ学問分野及び日本研究へのアプローチ方法を明らかにすることである。関心分野から日研究生の学習ニーズを知ることができ、カリキュラムやコースデザインの在り方を検討する手掛かりが得られるからである。

本調査では2009年度から2020年度までの12年間<sup>7</sup>に亘って日本の15大学に在籍していた日研究生が執筆した修了研究論文のテーマを分析対象とする。調査の概要は以下の表1の通りである。

なお、受け入れ大学の修了課題として「修了研究論文」、「修了研究レポート」、更には「エッセイ」の執筆や翻訳などが課されているが、本調査はその中の、修了「研究論文」及び「研究レポート」のみを対象として扱う。

表1 調査概要

対象期間	2009～2020年度
対象日研究生数	969名
修了研究テーマ件数	969件
在籍大学数	15校
総抽出語数	13,814
異なり語数	2,783

論文テーマの分析にはテキストマイニング手法を取り入れ、データ解析にKH Coder 3を用いた。日研究生の論文テーマはテキスト型の質的データであり、分析者が自らの問題意識に基づいて分析基準を定める従来型の計量的分析方法としてのdictionary basedアプローチでも十分に分析可能なものである。しかしながら、そのような内容分析では、分析者の理論や仮説の立証に都合の良いデータばかりが目される恐れがある。それに対して、テキストマイニングでは、多変量解析によって分析者の問題意識と関わりなく、データを要約・提示することができるため、客観性が担保された形でデータの特徴を明らかにすることが可能である。その上、KH Coderではデータの要約後にコーディングルールを作成し、仮説を検証すること等も可能であることから、本研究では同ソフトウェアをデータの解析に用いた。

調査データの採集は〈修了研究テーマ〉、〈国籍〉、〈在籍大学〉に限定し<sup>8</sup>、氏名などの対象者の特定につながるその他の個人情報収集対象外とした。調査の実施に際して対象大学より許可を得

るなどの倫理的配慮を十分に行ったが、本調査は個別大学の分析を目的とするものではないため、以下の考察において個別大学について触れる際に「A大学」などと記すことを通して匿名性を担保する。

なお、本調査の対象大学所在地の地域別の内訳は次の表2の通りである。

表2 対象大学の地域別内訳

地域	大学数
関東地方	5
中部地方	3
近畿地方	6
中国地方	1
合計	15

### 3. 日研生の日本探究の切り口

本節では先ず日研生の修了研究テーマから見えてくる一般的な傾向について頻出語の出現回数及び共起ネットワーク等を基に考察し、次にキーワードとなる高頻出語を抽出してより詳細に分析する。

#### 3.1 一般的な傾向

本節において頻出順位の上位語、頻出語の共起ネットワーク、「国籍」の特徴を示す語、更には論文作成「年度」を変数とした対応分布を基に修了研究テーマから見えてくる一般的な傾向について述べる。

##### 3.1.1 頻出順位上位 25 語

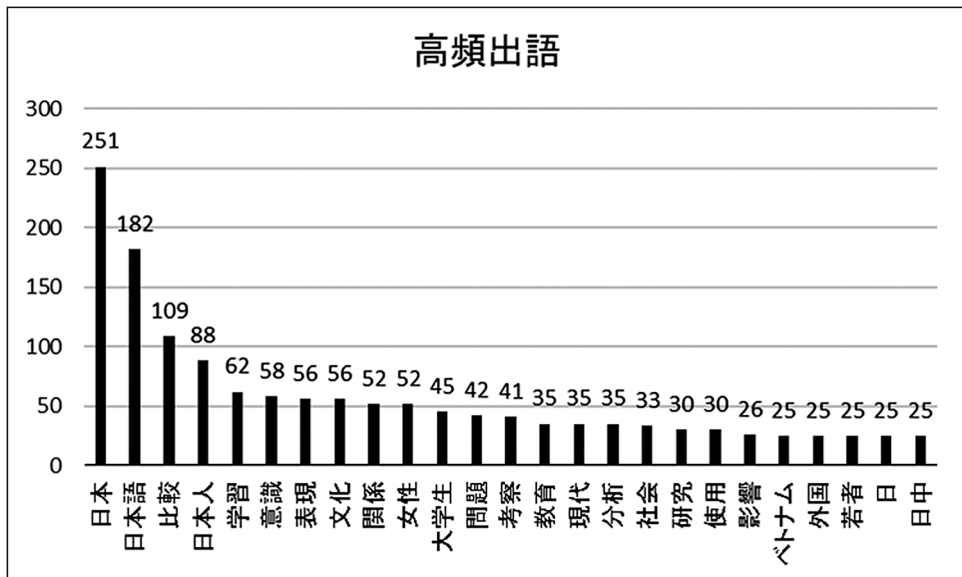


図1 頻出順位上位 25 語

上記の図1は日研生の修了研究テーマにおいて出現回数が最も多かった上位25語を示すものである。

図1から明らかなように日研生の修了研究テーマに「日本」、「日本語」「日本人」がそれぞれ1位、2位、4位として出現している。その割合が高く、上位25語の総出現回数の36.1%を占めている。日研生は日本語・日本文化に関わる研究に取り組むことが求められていることから考えると、これらが上位にランキングすることは当然であるが、日本の〈言語〉と〈人〉への関心の高さが窺われる。上記の図1に〈言語〉に関わる語が4つ（「日本語」、「学習」、「表現」、「(日本語)教育」<sup>9)</sup>）出現しており、同様に〈人〉と関わる語も4つ（「日本人」、「女性」、「大学生」、「若者」）出現している。

### 3.1.2 頻出語の共起ネットワーク

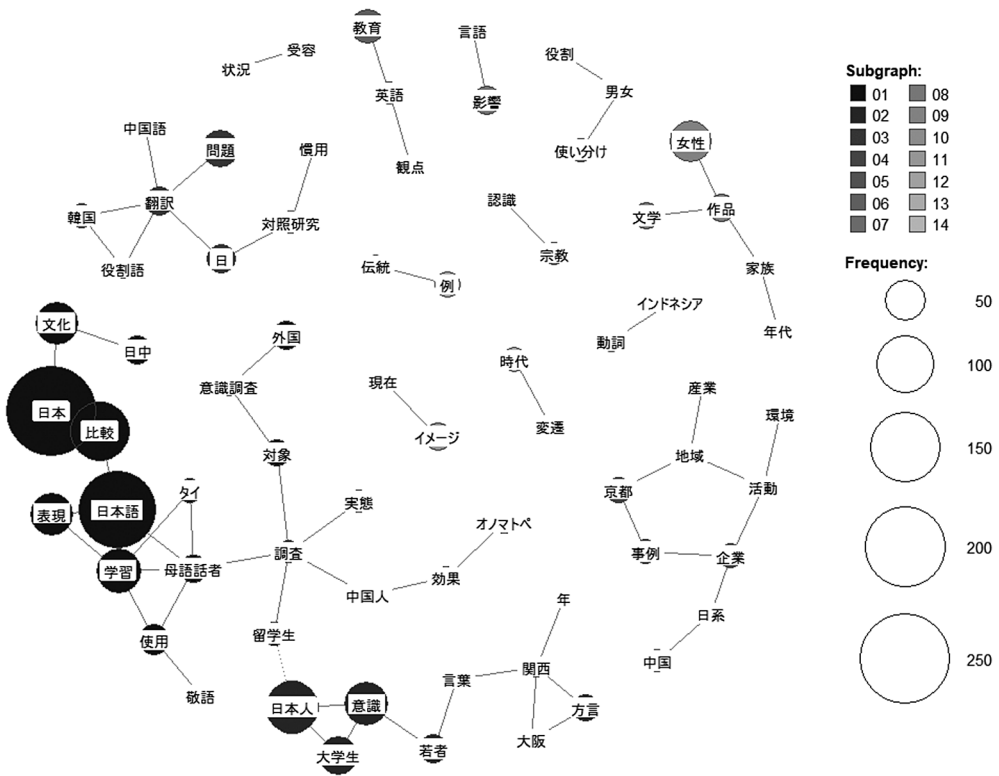


図2 頻出語の共起ネットワーク

図2の共起ネットワークは14のサブグラフから構成されている。頻出順位1の日本は「比較」と連結しており、その上、「日本文化」を介して「日中」とも繋がっている。ここから日研生の日本研究に（母国との）比較研究が多いことや更に、中国出身の日研生は同様のアプローチで研究に取り組むケースが多いことが示唆される。

一方、「日本語」は「学習」、「表現」、「母語話者」及び「比較」という4つの共起語を介して大きなネットワークを形成している。「表現」や「敬語」などは日本語研究の対象として頻繁に扱われていることや研究の切り口として比較研究や母語話者に対する使用実態調査などが多いことが窺

われる。

「日本人」も「意識」、「大学生」、「留学生」という三つの共起語と共にクラスターを形成している。共起語「意識」の出現からは、日本人や大学生、若者の意識が日研生の関心事の一つであることが窺える（修了研究テーマの例（以下、「例」）：「日中女子大学生のメイクアップに対する行動と心理の比較」）。同世代の若者や大学生の考え方などに対する関心もこのクラスターから読み取ることができる。

文学作品は、高い出現率を誇る「女性」と結合しており、女性研究の切り口となっていることが示唆される（例：「三島由紀夫の『宴のあと』における女性主人公」）。同様に図2から、日研究生は「家族」やその変化を研究する方法としても文学作品を活用していることがわかる。更に、「時代」、「年代」、「変遷」などもキーワードとして浮上していることから、日研究生は共時的研究のみならず、通時的な観点からの研究にも取り組んでいることがわかる。

共起ネットワークから「翻訳」や「方言」、「地域」もキーワードとして浮かび上がってくる。「方言」研究の対象として「大阪」弁や「関西」方言が扱われている。在籍大学の所在地の影響も因子として働いていると推察されるが、関西方言、とりわけ大阪方言が特別な文化として日研究生にも認識されている可能性が窺われる（例：「大学生における関西方言使用の意識と実態—依頼・命令表現について—」）。

「地域」は「産業」や「活動」、更には「京都」といった切り口から取り上げられている。歴史都市「京都」も同サブグラフに出現していることから示唆されるように、日本の伝統的なイメージも日研究生の関心事の一つと言える。

一方、「翻訳」は「中国語」及び「韓国」と頻繁に共起することが窺える。同クラスターに「問題」も共起しており、翻訳の課題解決を主題とした研究もあることがわかる（例：「漫画における役割語の翻訳によるキャラクター性の変化—日本語から韓国語への翻訳を例に—」）。

「教育」やジェンダーも日研究生の関心分野である。前者はとりわけ「英語」と結合するので、英語教育が日本を見る切り口の一つとなっていることがわかる（例：「高校における英語教育問題とその解決方法」）。

なお、日研究生は日本語・日本文化に関する分野を主専攻とする文系の学生であることから、科学技術やロボットなどに関する語は抽出されなかったが、インターネットやITの出現例は若干見られる。

### 3.1.3 特徴を示す語を通して見た国籍別の傾向

まず、日研究生の国籍と論文テーマの関わりについて、国籍と関わりの強い語を基に考察する。

研究テーマと国籍の相関を調べるために「国籍」を変数として見出し語の抽出を行った。以下の表3は、データの中に最も多く現れた6つの国籍を対象に、それぞれを特徴づける上位10語を抽出した結果である。なお、表3の数値は国籍と見出し語の関連を表す Jaccard の類似性測度であり、0～1までのスケールで関連性を表す。関連性が強ければ強いほど値が1に近い。

表3から明らかなように中国出身の日研究生は日中の対照研究に多く取り組んでおり、更に「女性」をテーマにする場合が多い。その上、文化や文学への関心度も高い。韓国出身の日研究生も対照的アプローチをとることが多く、日本語、文化、小説を研究対象として頻繁に選んでいる。ベトナム人日研究生も対照的アプローチを用いることが多く、日本語や日本人を研究対象とする傾向が見られる。一方、タイ出身の日研究生は日本人や大学生の行動等に関心が比較的高く、また日本語学習に関する

研究にも多く取り組んでいる（例：「日本人女性とタイ人女性の化粧意識・行動の比較」）。ポーランド出身の日研生の興味は相対的に広く、多岐に亘っている。見出し語「ポーランド」の関連性が最も高いことから、対照的アプローチからの研究が多いことが窺われる（例：「日本語とポーランド語のメールにおける謝罪表現の対照」）。インドネシア出身の日研生は日本語に関わる分野の研究に取り組むことが多いこと、更には母国との対照的アプローチをとることが多いことも見て取れる（例：「日本語における丁寧体と普通体の使い分け—『黒子のバスケ』に見られる関係・場面・状況を中心に—」）。

表3 国籍の特徴を示す語

中国		韓国		ベトナム	
日中	.141	韓国	.183	ベトナム	.291
女性	.068	日本語	.077	日越	.115
比較	.068	考察	.073	学習	.102
中国語	.060	文化	.058	日本語	.066
文化	.058	小説	.057	使い分け	.065
京都	.057	韓	.053	日本人	.063
文学	.057	日	.045	外国	.056
例	.057	表現	.043	動物	.055
考察	.049	意識	.042	関係	.052
現代	.045	学習	.042	状況	.052
タイ		ポーランド		インドネシア	
タイ	.333	ポーランド	.156	インドネシア	.320
日本人	.092	影響	.077	動詞	.091
大学生	.075	演劇	.057	依頼	.077
学習	.062	表現	.050	焦点	.077
日本語	.057	問題	.044	丁寧	.077
比較	.056	女性	.042	複合	.071
行動	.052	翻訳	.039	オノマトペ	.057
事例	.049	イメージ	.039	日本語	.052
京都	.048	外国	.037	学習	.052
母語話者	.048	教育	.033	翻訳	.047

以上の国籍別の考察からは、国籍如何に拘わらず、日研生の研究の中に母国との対照研究が多いことが示されている（例：「バリアフリーから共生社会へ—日中バリアフリーの比較—」、「日本と韓国におけるウェブ小説の共通点と相違点について」、「職場における性別差の日越比較」など）。一方、関心分野に関しては国籍による相違が現れているのである。

### 3.1.4 対応分析を通して見た論文作成年度の特徴

日研生の修士研究テーマ設定にその論文が作成された時期の（国際・）社会情勢等は何らかの影

響を及ぼしたのだろうか。以下において、対応分析及び特徴を示す語を基準としながら、論文を作成した年度と頻出語の関わりについて考察する。

高木他（2011: 135）は、481名の学部学生の対人社会心理学に関する卒業論文のテーマ分析を基に、年代を経るごとに少なくなるテーマと近年増えてきたテーマがあること、更に全般的にテーマの多様化が起きていることを指摘している。また、Farnoush他（2016）も1995年から2014年まで *American Journal of Pharmaceutical Education* に掲載された3220本の論文のタイトルを分析し、トレンドになっているテーマとしてアクティブ・ラーニング、インタープロフェッショナル、カルチャラル・コンピテンシーを抽出している。

本調査の対象は2009年度から2020年度までの12年間であり、その期間中に同様の傾向や変化はないか、論文作成の年度と論文テーマの相関を基に考察する。

各論文の作成年度と頻出語の相関を調べるために対応分析を行った。図3は、成分1の頻出語と成分2の論文作成年度による同時布置であり、それらの関わりを示すものである。

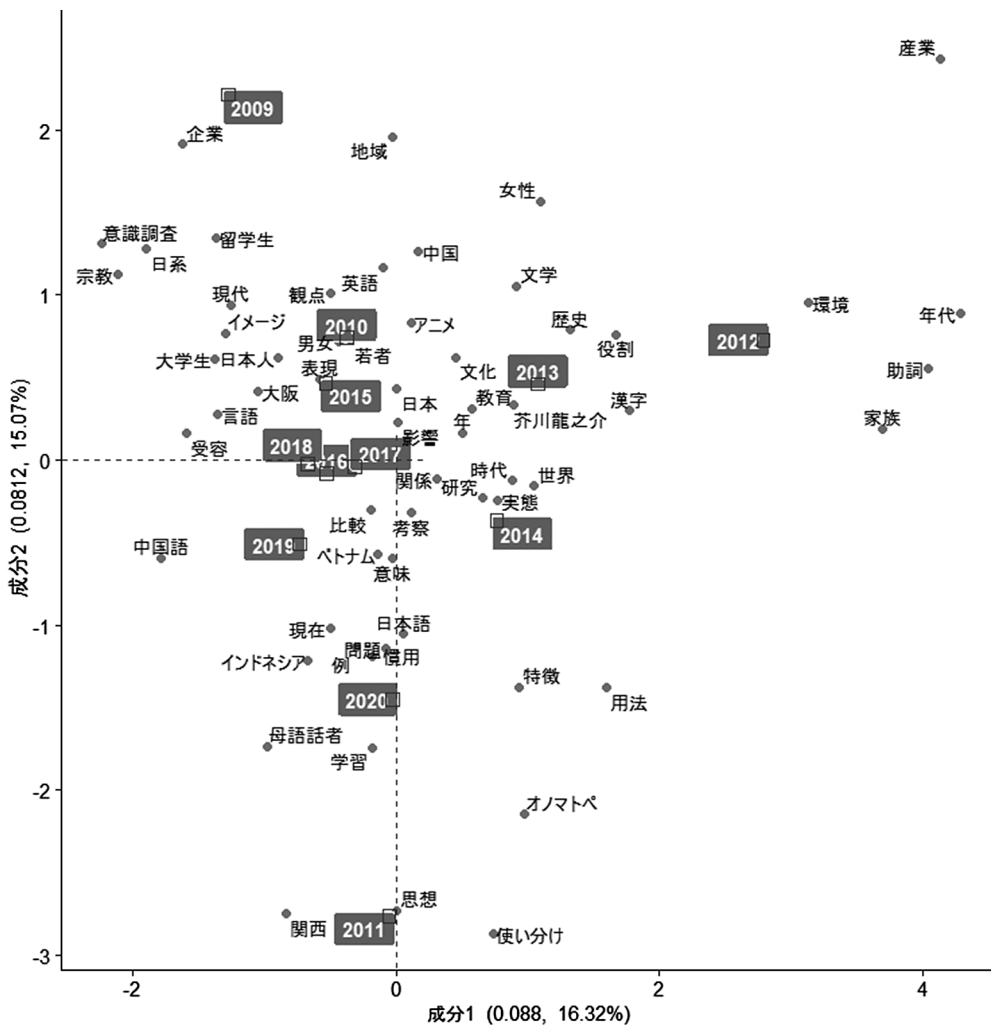


図3 論文作成「年度」と上位語の対応関係



図3から明らかなように、2009年度の近くに「企業」や「日系」という語がプロットされており、関わりが深い語として浮上している。つまり、この頃の日本企業は日研生の日本を見る重要な切り口となっていたと言える<sup>10</sup>。そのことが表4で示す2009年度の特徴を示す語からも窺われる。

表4 中心から離れている年度の特徴を示す語

2009		2011		2012	
日本	.071	学習	.065	日本	.059
企業	.068	使い分け	.059	助詞	.059
現代	.067	日本語	.054	家族	.058
女性	.059	特徴	.053	年代	.057
日系	.057	信仰	.049	関係	.056
表現	.055	社会	.049	日本語	.052
日本人	.050	思想	.048	女性	.049
形成	.045	オノマトペ	.045	文化	.045
宗教	.041	問題	.044	文学	.038
留学生	.040	小説	.042	ベトナム	.037

2013		2019		2020	
比較	.081	日本語	.084	日本語	.078
日本	.074	日本	.083	文化	.063
女性	.059	学習	.074	母語話者	.062
中国	.055	比較	.065	問題	.060
日本人	.051	ベトナム	.056	学習	.059
研究	.048	日本人	.046	現在	.053
文化	.047	イメージ	.044	分析	.051
歴史	.042	影響	.043	対照研究	.049
作品	.040	外国	.043	例	.046
学習	.037	教育	.040	作品	.043

2011年度及び2019、2020年度は日本語と関わりのあるテーマが多く選定されていることが図3及び表4からわかる。このような特徴と当該年度採用された日研生の国籍別割合との間に何らかの因果関係がある可能性はあるが、その関連性は本調査では不明である。

2012年度も中央から離れている。近くにプロットされている「環境」との関連性について見出し語を抽出して検証したが、「環境」との強い因果関係は見られなかった。

一方、2013年度の日研生は、「女性」、「文化」、「歴史」などに関わるテーマを多く選定していたことがわかる。

2019年度及び2020年度は日本語関連のテーマを選んだ日研生が多かった。その傾向性の今後の推移を見守る必要がある。

図3が示しているように、それ以外の年度において作成された論文のテーマは中央に近い位置を占めており、平均的な特徴を有している。これらの年度において「若者」、「大学生」といった身近な日本人や日本語表現、アニメなどと関わるテーマが多く選定されている。



### 3.2 高頻出語から見た日研生の日本に対する関心事

以下において、頻出順で 10 位以内にランキングした高頻出語を抽出し、それらと関連の強い語（関連語と呼ぶ）を基に日研生の日本探究の切り口についてより詳細に考察する。分析対象の高頻出語と共に、同一の研究テーマ内に出現する確率の高い上位 20 語を抽出し、それらがデータ全体の中に何回出現したか（「全体」の列、括弧内は出現確率（前提確率））、更に当該の高頻出語と実際に何回共起したか（「共起」の列、括弧内は条件付き確率）を調べた。なお、以下の表の表示順「N」は類似性測度（Jaccard 係数）に基づいているが、その値はスペースの関係上省略してある。

#### 3.2.1 「日本」

先ず、頻出順位 1 位の「日本」について考察する。「日本」の関連語は以下の表 5 の通りである。

表 5 高頻度抽出語「日本」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	比較	107 (0.110)	35 (0.146)	11	伝統	12 (0.012)	7 (0.029)
2	文化	53 (0.055)	26 (0.108)	12	中国	15 (0.015)	7 (0.029)
3	女性	44 (0.045)	17 (0.071)	13	企業	16 (0.017)	7 (0.029)
4	考察	41 (0.042)	15 (0.063)	14	アニメ	18 (0.019)	7 (0.029)
5	現代	33 (0.034)	12 (0.050)	15	対象	21 (0.022)	7 (0.029)
6	問題	40 (0.041)	12 (0.050)	16	京都	20 (0.021)	6 (0.025)
7	教育	32 (0.033)	11 (0.046)	17	例	20 (0.021)	6 (0.025)
8	現状	20 (0.021)	10 (0.042)	18	イメージ	23 (0.024)	6 (0.025)
9	若者	23 (0.024)	10 (0.042)	19	特徴	24 (0.025)	6 (0.025)
10	ベトナム	21 (0.022)	8 (0.033)	20	小学校	5 (0.005)	5 (0.021)

「日本」に対する研究は比較研究のアプローチから行われる顕著な傾向性があることが「比較」が 1 位を占めていることから浮き彫りになる。

更に、表 5 から明らかなように「文化」、「女性」、「現代」、「問題」、「教育」、「若者」、「伝統」などは「日本」という語と直接結びついていることがわかる。国際交流基金が実施した「2018 年度日本語教育機関調査」において「日本語学習の目的」の 1 位を占めていた「アニメ・マンガ・J-POP・ファッション等への興味」（国際交流基金 2020）の中から、「アニメ」も「日本」の関連語として出現している。「アニメ」の全体における頻出順位は 39 位となっている。一方、マンガ、J-POP、ファッションも論文テーマに出現しているが、出現順位はアニメよりも低い。この出現順位からすると、日本語学習の初歩的動機であることが多い「アニメ・マンガ」等がそのまま動機として維持・発展されるわけではないことがわかる（森他 2008）。

#### 3.2.2 「日本語」

頻出順位 2 位の「日本語」に関する研究は日本語「学習」、日本語の「表現」「母語話者」（との比較・母語話者への調査・母語話者の使用実態・意識など）、「日本語教育」などに関わるものが多く、しかも母語との対照研究も多いことが表 6 から窺える。更に、「役割語」「敬語」「オノマトペ」などの日本語の特質が現れる領域も研究対象となっている。

表6 高頻度抽出語「日本語」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	学習	58 (0.060)	50 (0.314)	11	現代	33 (0.034)	10 (0.063)
2	表現	53 (0.055)	26 (0.164)	12	対照研究	15 (0.015)	9 (0.057)
3	母語話者	20 (0.021)	20 (0.126)	13	韓国	18 (0.019)	9 (0.057)
4	比較	107 (0.110)	27 (0.170)	14	役割語	11 (0.011)	7 (0.044)
5	使用	27 (0.028)	11 (0.069)	15	敬語	12 (0.012)	7 (0.044)
6	教育	32 (0.033)	11 (0.069)	16	オノマトベ	14 (0.014)	7 (0.044)
7	分析	34 (0.035)	11 (0.069)	17	考察	41 (0.042)	8 (0.050)
8	ベトナム	21 (0.022)	10 (0.063)	18	タイ	19 (0.020)	7 (0.044)
9	中国語	12 (0.012)	9 (0.057)	19	対象	21 (0.022)	7 (0.044)
10	動詞	13 (0.013)	9 (0.057)	20	研究	29 (0.030)	7 (0.044)

日本語を研究対象とした日研生の国籍に着目すると、ベトナム、中国、韓国、そしてタイ出身の日研究生は対照研究に取り組む傾向が相対的に強いことが示されている（例：「ベトナム語の漢越語と日本語の漢字の対照分析」、「日中受身文の対照研究と中国語話者学習者の誤用分析—中国語話者を対象とした日本語受身文指導に向けて—」、「メッセンジャーにおける依頼表現の日韓比較」、「タイ人日本語学習者の動詞の省略に対する理解—日本人母語話者と比較して—」）。「中国語」が出現しているテーマでは「翻訳」や「日本語の起源」など、一方、「ベトナム」が出現しているテーマでは「日本語学習」や「企業」など、「韓国」が出現しているテーマでは「日本語学習」、「翻訳」、「ドラマ」など、「タイ」が出現しているテーマでは「日本語学習」「日本人」「女性」などの共起度が高いことがコロケーション統計で明らかになった。このことから日研生の国籍や背景がテーマ選定に影響を与えていることが示唆される。

### 3.2.3 「日本人」

表7 高頻度抽出語「日本人」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	大学生	41 (0.042)	19 (0.224)	11	若者	23 (0.024)	5 (0.059)
2	意識	56 (0.058)	21 (0.247)	12	外国	25 (0.026)	5 (0.059)
3	留学生	16 (0.017)	8 (0.094)	13	アンケート調査	6 (0.006)	4 (0.047)
4	学生	9 (0.009)	7 (0.082)	14	現代	33 (0.034)	5 (0.059)
5	結婚	9 (0.009)	6 (0.071)	15	学習	58 (0.060)	6 (0.071)
6	行動	16 (0.017)	6 (0.071)	16	使い分け	16 (0.017)	4 (0.047)
7	比較	107 (0.110)	11 (0.129)	17	ベトナム	21 (0.022)	4 (0.047)
8	関係	51 (0.053)	7 (0.082)	18	イメージ	23 (0.024)	4 (0.047)
9	タイ	19 (0.020)	5 (0.059)	19	表現	53 (0.055)	5 (0.059)
10	対象	21 (0.022)	5 (0.059)	20	発音	8 (0.008)	3 (0.035)

頻出順位4位の「日本人」の関連語からは、「大学生」「若者」などの同世代の日本人に対する関心が高いことや同様の身近な切り口が日研究生の研究で多く用いられていることがわかる。更に、

社会的な観点からは、日本人の「意識」、「結婚」、「行動」などが注目されていること、言語の面では、「表現」や「発音」が研究対象のテーマとなっていることが窺われる。「大学生」を対象にコロケーション統計を行ってみると、「女子」大学生、「意識」に対する注目度が高いことがわかる。

### 3.2.4 表現

出現順位7位の日本語「表現」として研究対象となっているのは「依頼」表現、「待遇」表現、「方言」や「感情」表現などであることが表8から見て取れる。日本語表現に対する研究は母語との対照の形で行われることが多く、とりわけベトナム、中国、韓国出身の日研生は対照的研究に多く取り組むことがコロケーション統計で明らかになった。更に、「学習」に対してコロケーション統計をしてみると、学習環境、学習方法などが浮上する。

表8 高頻度抽出語「表現」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	日本語	159 (0.164)	26 (0.491)	11	用法	9 (0.009)	3 (0.057)
2	依頼	5 (0.005)	5 (0.094)	12	現代	33 (0.034)	4 (0.075)
3	学習	58 (0.060)	9 (0.170)	13	使い分け	16 (0.017)	3 (0.057)
4	待遇	4 (0.004)	4 (0.075)	14	方言	17 (0.018)	3 (0.057)
5	条件	5 (0.005)	4 (0.075)	15	タイ	19 (0.020)	3 (0.057)
6	ベトナム	21 (0.022)	5 (0.094)	16	研究	29 (0.030)	3 (0.057)
7	比較	107 (0.110)	9 (0.170)	17	選択	2 (0.002)	2 (0.038)
8	母語話者	20 (0.021)	4 (0.075)	18	文末	2 (0.002)	2 (0.038)
9	使用	27 (0.028)	4 (0.075)	19	日本人	85 (0.088)	5 (0.094)
10	可能	8 (0.008)	3 (0.057)	20	感情	3 (0.003)	2 (0.038)

### 3.2.5 「文化」

表9 高頻度抽出語「文化」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	日本	240 (0.248)	26 (0.491)	11	中国	15 (0.015)	3 (0.057)
2	日中	25 (0.026)	6 (0.113)	12	留学生	16 (0.017)	3 (0.057)
3	伝統	12 (0.012)	4 (0.075)	13	歴史	18 (0.019)	3 (0.057)
4	比較	107 (0.110)	9 (0.170)	14	京都	20 (0.021)	3 (0.057)
5	オタク	3 (0.003)	3 (0.057)	15	例	20 (0.021)	3 (0.057)
6	考察	41 (0.042)	5 (0.094)	16	翻訳	22 (0.023)	3 (0.057)
7	両国	6 (0.006)	3 (0.057)	17	イメージ	23 (0.024)	3 (0.057)
8	ビジネス	7 (0.007)	3 (0.057)	18	外国	25 (0.026)	3 (0.057)
9	相違	9 (0.009)	3 (0.057)	19	継承	2 (0.002)	2 (0.038)
10	受容	11 (0.011)	3 (0.057)	20	国人	2 (0.002)	2 (0.038)

「文化」は「日本文化」という結合としても高頻度表現であるが、それ自体出現頻度8位の語となっている。「文化」の関連語で共起度が高い語に「日中」、「比較」、「両国」、「中国」が現れている。

ることから、中国出身の日研究生は日中に関わる比較文化研究に相対的に多く取り組んだことがわかる。「伝統」や「歴史」、「京都」などが「文化」のキーワードとなっていることから窺えるようにハイカルチャーに対する関心度も高い。一方、「オタク」文化や「ビジネス」なども修了研究テーマの中に出現している。

コロケーション統計を実施してみると、様々な語が「文化」と共起しており、食文化、生活文化などの特定の領域に関する考察や日本独自のオタク文化、コンビニ文化、カワイイ文化、カラオケ文化、キャラクター文化などに焦点を当てた研究が行われていることがわかる。その上、文化の「受容」、「継承」、「変容」、「交流」などを切り口とする研究も見られる。

### 3.2.6 「関係」

「関係」は頻出順位の9位を占めている。表10の関連語から明らかなように「人間」関係、「対人」関係、「夫婦」関係といった日本社会における人と人との関りに焦点を当てた研究が見られる。更に、「日中」関係や「アメリカ」人と（「沖縄人」）の関係、「領土」問題などの国際関係に纏わるテーマが対象となっているケースもある。更に、コロケーション統計からは、「友人」、「恋愛」、「親子」関係、「職場」における人間関係、「親疎」関係なども考察対象となっていることがわかった。

表10 高頻度抽出語「関係」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	人間	7 (0.007)	4 (0.078)	11	アメリカ	2 (0.002)	2 (0.039)
2	日	25 (0.026)	5 (0.098)	12	情緒	2 (0.002)	2 (0.039)
3	使い分け	16 (0.017)	4 (0.078)	13	有無	2 (0.002)	2 (0.039)
4	対人	3 (0.003)	3 (0.059)	14	領土	2 (0.002)	2 (0.039)
5	友人	4 (0.004)	3 (0.059)	15	研究	29 (0.030)	3 (0.059)
6	日本人	85 (0.088)	7 (0.137)	16	社会	30 (0.031)	3 (0.059)
7	企業	16 (0.017)	3 (0.059)	17	英	3 (0.003)	2 (0.039)
8	大学生	41 (0.042)	4 (0.078)	18	感情	3 (0.003)	2 (0.039)
9	変化	19 (0.020)	3 (0.059)	19	場面	3 (0.003)	2 (0.039)
10	日中	25 (0.026)	3 (0.059)	20	夫婦	3 (0.003)	2 (0.039)

### 3.2.7 「女性」

頻出順位10位の「女性」は日研究生研究の一つのキーワードとして浮かび上がってくるものと言える。日本社会における女性のイメージや地位などが日本を理解する切り口となっている。「女性」を探究する方法として日研究生は「小説」、「文学」などの「作品」や「諺」を用いていることが表10から明らかである。考察対象として「女性」の「化粧」、「行動」、「イメージ」なども浮上しており、社会的「地位」や「職場」「出産・育児」についての研究も見られる。コロケーション統計からは平安時代や明治時代といったある特定の時代の女性に焦点を当てたケースもあることがわかった。

なお、本調査では論文執筆者の性別情報を扱っていないので、女性を研究対象として選定したのは男子学生か、女子学生かは不明である<sup>11</sup>。

表 11 高頻度抽出語「女性」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	作品	24 (0.025)	6 (0.136)	11	SF	2 (0.002)	2 (0.045)
2	小説	19 (0.020)	4 (0.091)	12	出産	2 (0.002)	2 (0.045)
3	文学	20 (0.021)	4 (0.091)	13	育児	3 (0.003)	2 (0.045)
4	化粧	4 (0.004)	3 (0.068)	14	美	3 (0.003)	2 (0.045)
5	作家	5 (0.005)	3 (0.068)	15	諺	4 (0.004)	2 (0.045)
6	日本	240 (0.248)	17 (0.386)	16	職場	4 (0.004)	2 (0.045)
7	年代	11 (0.011)	3 (0.068)	17	地位	4 (0.004)	2 (0.045)
8	行動	16 (0.017)	3 (0.068)	18	女	5 (0.005)	2 (0.045)
9	考察	41 (0.042)	4 (0.091)	19	社会	30 (0.031)	3 (0.068)
10	イメージ	23 (0.024)	3 (0.068)	20	男性	6 (0.006)	2 (0.045)

#### 4. 研究分野別に見る日研生の関心事

頻出順位上位 50 件のデータを対象に「研究」、「比較」、「考察」といった研究方法等に関わる語や特定の学術分野に属さない「意識」のような語を取り除いた上で、分野別に分類してみた<sup>12</sup>。その結果は図 4 の通りである。

図 4 が示している通り、日研生の研究対象として最も選択されていたのは日本語に関わる分野で、日本社会がそれに次ぐ。また、日本文化の 카테고리の中に位置づけられる研究も 9.9% 見られる。続いて、文学、教育、企業・ビジネス・産業、アニメ、歴史に関する論文が多いことがわかる。

しかしながら、日研生の修士研究論文のテーマは特定の周辺的な事柄を扱うケースが多く、特定の学問分野と直接連結していない場合もある。

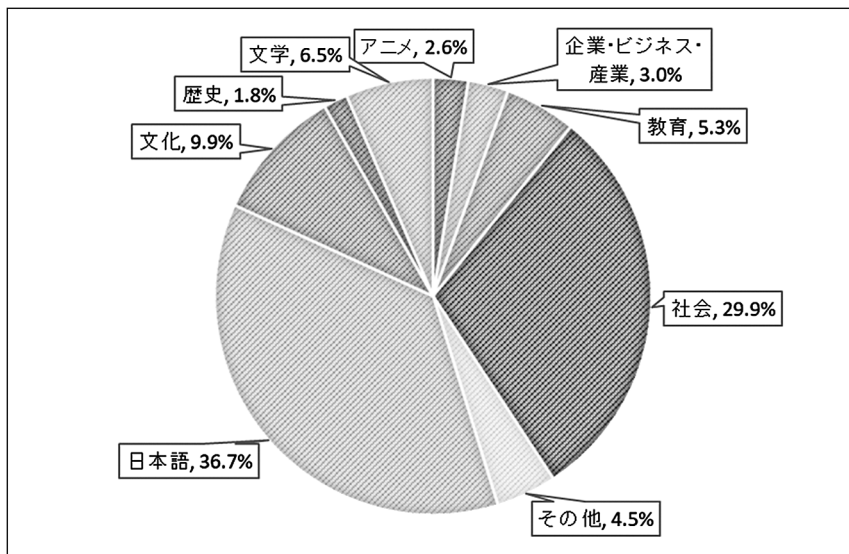


図 4 分野別出現比率

また、日研究生は修了研究論文を帰国後に母国大学の卒業論文として発展させることは珍しくない<sup>13</sup>。日本で作成した論文がそのまま卒業論文として認められる事例も見られる。それ故、母国大学の指導教員に相談してから修了研究のテーマを決める日研究生もいる。

また、丸野（2016: 43）は、日本人学部学生の卒業論文のテーマにおいて指導教員の専門分野の特徴が顕著に現れることを明らかにしている。

このように、修了研究に取り組む学術分野の選定を左右する要因として、本人の関心はもとより、母国大学・日本の受け入れ大学の指導教員の専門分野、出身大学の学部の構成や時代背景などといった様々な要因が関与していると考えられるが、その実態の解明には更なる調査が必要である。

## 5. 日研究生の日本研究へのアプローチ

日研究生の修了研究はどのようなアプローチ<sup>14</sup>で行われたのだろうか。本節では高頻出語「比較」、「意識」及び「考察」の関連語を抽出し、それらを手掛かりに分析する。各表の関連語の表示方法は3.2の関心事の場合と同様の方法による。

### 5.1 「比較」

表12で示す頻出順位3位の「比較」の関連語からは日本語、とりわけ日本語（・表現）、そして日本、日本文化、日本人に関わる研究の多くが比較的なアプローチで行われていることが窺われる。更に、「日中」、「日越」、「タイ」、「ロシア」、「中国語」などの関連語からは、日研究生の母国と日本の比較が多くなされたこと、そのような比較的な手法を多く取り入れているのは中国、ベトナム、タイ、ロシア出身の日研究生であることがわかる。

表12 高頻度抽出語「比較」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	日本語	159 (0.164)	27 (0.252)	11	中国	15 (0.015)	5 (0.047)
2	日本	240 (0.248)	35 (0.327)	12	考察	41 (0.042)	6 (0.056)
3	意識	56 (0.058)	10 (0.093)	13	タイ	19 (0.020)	5 (0.047)
4	日本人	85 (0.088)	11 (0.103)	14	母語話者	20 (0.021)	5 (0.047)
5	表現	53 (0.055)	9 (0.084)	15	特徴	24 (0.025)	5 (0.047)
6	文化	53 (0.055)	9 (0.084)	16	外国	25 (0.026)	5 (0.047)
7	大学生	41 (0.042)	8 (0.075)	17	社会	30 (0.031)	5 (0.047)
8	日中	25 (0.026)	7 (0.065)	18	ロシア	9 (0.009)	4 (0.037)
9	日	25 (0.026)	6 (0.056)	19	慣用	11 (0.011)	4 (0.037)
10	日越	8 (0.008)	5 (0.047)	20	中国語	12 (0.012)	4 (0.037)

### 5.2 「意識」

頻出順位6位の「意識」は「日本人」、「大学生」、「若者」と共起することが多いことから、「意識」は日本人とりわけ同世代の日本人を探究する切り口となっていることがわかる。表13からは「結婚」、「方言」、「ジェンダー」意識、「学習」意識はキーワードとして浮かび上がっており、それらへの日研究生の関心の高さが窺われる。



表 13 高頻度抽出語「意識」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	日本人	85 (0.088)	21 (0.375)	11	実態	15 (0.015)	3 (0.054)
2	大学生	41 (0.042)	14 (0.250)	12	行動	16 (0.017)	3 (0.054)
3	結婚	9 (0.009)	6 (0.107)	13	母語話者	20 (0.021)	3 (0.054)
4	若者	23 (0.024)	7 (0.125)	14	日	25 (0.026)	3 (0.054)
5	方言	17 (0.018)	5 (0.089)	15	学習	58 (0.060)	4 (0.071)
6	比較	107 (0.110)	10 (0.179)	16	タイ	2 (0.002)	2 (0.036)
7	使用	27 (0.028)	5 (0.089)	17	大震災	2 (0.002)	2 (0.036)
8	トルコ	4 (0.004)	3 (0.054)	18	東日本	2 (0.002)	2 (0.036)
9	ジェンダー	5 (0.005)	3 (0.054)	19	同棲	2 (0.002)	2 (0.036)
10	関西	11 (0.011)	3 (0.054)	20	海外	3 (0.003)	2 (0.036)

### 5.3 「考察」

「考察」は頻出順位の13位を占めており、アプローチを表す用語として3番目に多く用いられている。「考察」は文化や文学、更には社会系の研究のアプローチとして用いられていることが多いこと、言語はその関連語として抽出されていないことが表14から窺える。

表 14 高頻度抽出語「考察」の関連語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	基づく	3 (0.003)	3 (0.073)	11	幸福	3 (0.003)	2 (0.049)
2	受容	11 (0.011)	3 (0.073)	12	実際	3 (0.003)	2 (0.049)
3	日本	240 (0.248)	15 (0.366)	13	桜	4 (0.004)	2 (0.049)
4	文化	53 (0.055)	5 (0.122)	14	仕事	5 (0.005)	2 (0.049)
5	小説	19 (0.020)	3 (0.073)	15	要素	5 (0.005)	2 (0.049)
6	女性	44 (0.045)	4 (0.098)	16	映画	6 (0.006)	2 (0.049)
7	解放	2 (0.002)	2 (0.049)	17	概念	6 (0.006)	2 (0.049)
8	初期	2 (0.002)	2 (0.049)	18	社会	30 (0.031)	3 (0.073)
9	定義	2 (0.002)	2 (0.049)	19	人間	7 (0.007)	2 (0.049)
10	日中	25 (0.026)	3 (0.073)	20	比較	107 (0.110)	6 (0.146)

なお、グーグルフォームを利用したアンケート調査の利便性の高さから、同手法に基づいた調査研究が多くなった可能性が推察される。しかし、日研生の修了研究テーマからはそのような傾向性は見られなかった。無論、アンケート調査によってデータ収集を行ったとしても、研究題目にそのことが反映されるとは限らない。実際、アンケート（調査）がタイトルに現れた研究は全データ内に9件しかなかった。

グーグルフォームのサービス提供は2017年に開始されたことから考えると、同手法を用いる研究はこれからも増えていく可能性がある。しかし、その影響は研究のタイトルからだけでは明らかにできないので、今後他の調査方法も取り入れながら、日研生の研究の動向や傾向性、効果等を注視する必要がある。



## 6. 受け入れ大学における日研究生プログラムの種別と日研究生の研究分野の比較

日研究生、とりわけ大使館推薦の日研究生はコースガイドを基に留学を希望する大学を選定する。コースガイドには全ての受け入れ大学のプログラムの概要が記載されている。コースガイドは文部科学省が定めた統一のフォーマットに沿って作られており、故に留学希望者にとって大学別のプログラムのカリキュラム等の概要を視覚的且つ対照的に捉えることができる。

同コースガイドの一つの項目に「研究・コースの目的」がある。受け入れ大学はコースガイドを作成する際に、以下の a)、b) の二つの選択肢より、それぞれの大学が開設するプログラムの目的に合致するものを選択することになっている。

- a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
- b) 主に日本語能力の向上のための研修

上述の目的の種別による大学の分類と日研究生のテーマ選定との間に何らかの相関関係があるのかを調べるために、「大学」を変数としながら、対応分析を行ってみた。

本調査で対象として扱った 15 大学の目的の種別は以下の表 15 の通りである。

表 15 対象大学の「研究・コースの目的」

番号	大学名(仮名)	目的の種別
1	A 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
2	B 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修 b) 主に日本語能力の向上のための研修
3	C 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
4	D 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
5	E 大学	b) 主に日本語能力の向上のための研修
6	F 大学	b) 主に日本語能力の向上のための研修
7	G 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
8	H 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
9	I 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
10	J 大学	b) 主に日本語能力の向上のための研修
11	K 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
12	L 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
13	M 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
14	N 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修
15	O 大学	a) 主に日本事情・日本文化に関する研修

(各大学の目的の種別は『2021 年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生 日本語・日本文化研修留学生コースガイド』による)

図 5 は、成分 1 の頻出語と成分 2 の対象大学による同時配置である。

図 5 の散布図において各大学は、それぞれの大学にとって特徴的な語の近くに出現している。同散布図から明らかのように、「主に日本事情・日本文化に関する研修」を目的として挙げている H 大学、C 大学、I 大学はむしろ日本語に近い位置に配置されている。同様に、「主に日本語能力

の向上のための研修」を行うことを目的として掲げている F 大学、J 大学は日本語からある程度離れた位置に布置されている。

文化に最も近い位置を占めている D 大学及び N 大学の場合は目的の категория が一致していると言える。a)、b) 両方の目的を掲げる B 大学は相対的に日本語に近い位置を占めている。

散布表はあくまでも日研生の修了研究テーマに基づいているので、日研生の全ての学習ニーズを反映しているわけでは無論ない。しかし、日研生の個別ニーズを示す一指標であることも事実である。

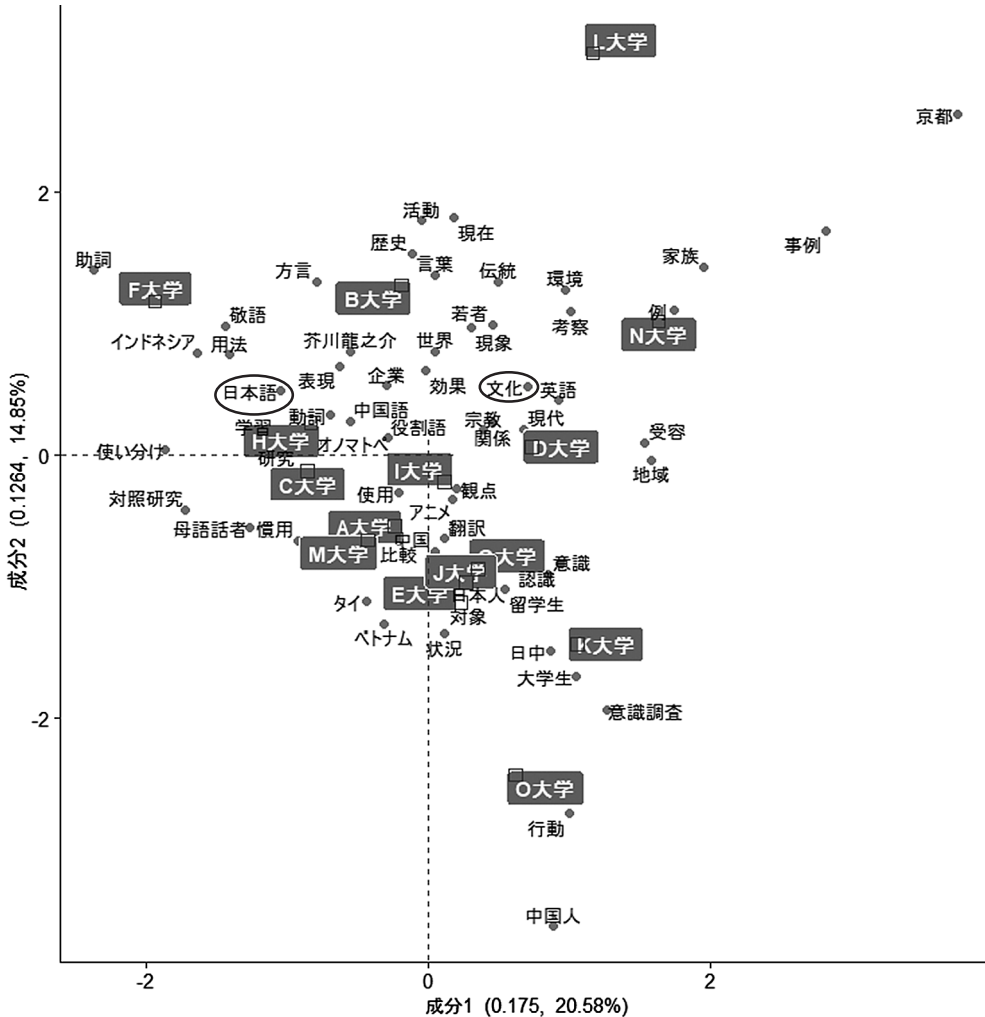


図5 対応分析・大学

学習ニーズと目的設定、カリキュラム・デザイン、更には目的のラベリング、すなわちプログラムの分類法がより実情に即した形となれば、各大学の想定日研究生像に合致した学生を受け入れることができるようになり、教育の更なる充実が期待できるのではないだろうか。そのような改善がなされれば、日研究生プログラムの受講を希望する学生にとっても自分の留学目的により合致した大学を選択することができるようになると考えられる。

## 7. 終わりに

以上、日研生の修了研究テーマを基に日研生の日本探究の切り口、関心を持つ学問分野及び日本研究へのアプローチ方法について考察してきた。その結果、分野別にみると、日研究生は日本語、日本社会、日本文化、文学、日本の教育などのフィールドの研究に多く取り組むことがわかった。日研究生は日本を見る切り口として日本語、とりわけ日本語の表現を対象として選定することが多いことや日本語に対する研究方法として母国語との比較を行うことが多いことも明らかになった。

日研究生の日本探究の方法として重要な位置を占めるもう一つの切り口として日本人、とりわけ身近な大学生や若者が挙げられる。日本人、大学生、若者に対しては意識調査に基づいた研究が行われる傾向性が示された。

更に、高頻出語や頻出語の共起ネットワークからは上述の主要分野に加えて、女性、翻訳、方言なども日研究生の関心事として浮かび上がってきた。女性を探究する方法として文学作品や諺などが多く用いられていること、翻訳に関しては特定の二か国間の翻訳における課題などが焦点となっていること、方言として特に関西方言が注目されていることが明らかになった。

更に、国籍別に見た場合、国籍に関わりなく、母国との対照研究に取り組むケースが多く見られること、一方、中国、ベトナム、タイ、ロシア出身の日研究生は他の国籍保有者よりも対照研究的な手法を用いる傾向があることなどが明らかになった。

上述した調査結果から日研究生の個別ニーズを知ることができ、故にカリキュラム・デザインやカリキュラム検証のための手掛かりとして有用である。また、本調査で明らかにした各大学の目的の種類と頻出語の関わりは目的設定の在り方を検討する一つの資料となり得る。

しかしながら、本調査では修了研究のテーマ選定を左右する外部要因としての母国大学・日本の受け入れ大学の指導教員の専門分野、出身大学の学部の構成や時代背景といった諸要因を分析することができなかった。その上、データの属性に大使館推薦、大学推薦の別が含まれていなかったため、その違いの解明はできなかった。それらを踏まえたより綿密な調査の実施を今後の課題としたい。

### 謝辞

本報告のデータ収集に、松村薫子先生、リチャード・ハリソン先生をはじめとする多くの方々のご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。また、「令和3年度 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議」にて口頭発表を行った際に貴重なコメントをくださった先生方に感謝申し上げます。

### 注

- 1 本報告は2021年11月19日に大阪大学で行われた「令和3年度 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議」にて行った口頭発表を基に、データを大幅に補充し、発展させたものである。
- 2 「2021年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 日本語・日本文化研修留学生（大学推薦）」に基づく。
- 3 『2021年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生日本語・日本文化研修留学生コースガイド』及び「令和3年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議」資料による。但し、受け入れプログラムを開設した大学の数は日研究生が実際に配置された大学数を意味するわけではない。
- 4 「2021年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生募集要項 日本語・日本文化研修留学生（大学推薦）」

による。

- 5 2012年においては71.4%の受け入れ大学においてカリキュラムの一環として何らかの課題研究が設けられていた(パリハワダナ・森 2012: 93)。
- 6 約9割近くの日研究生修了生は日本との関わりを継続していくことが修了生に対する追跡調査で明らかになっている。
- 7 ただし、全期間の論文テーマを収集できたのは3校のみで、残りの12大学のデータは入手できた期間に限定されている。なお、以下の記述における図表のデータは全大学を対象としている。
- 8 大使館推薦・大学推薦の別は有用な分析基準であるが、限定的にしか情報収集ができなかったため、本調査の対象外とせざるを得なかった。
- 9 コロケーション統計から「教育」が日本語教育を指している場合が多いことが窺われる。
- 10 2005-2007の期間に京都大学に在籍していた日研究生の修了研究テーマを分野別に分類した調査結果でも経済学分野は言語に次ぐ2位を占めていた(森・パリハワダナ 2010: 79)。
- 11 筆者の所属大学でも例年のように女性に纏わるテーマを選定する日研究生はいるが、執筆者は殆ど女子学生である。
- 12 高頻出語の上位25語は図1で示した通りである。「文学」「作品」「小説」を「文学」としてカテゴリー化するといった形で項目を抽出した。複数項目に跨る語は「その他」として扱っている。
- 13 森他(2008: 44)において実施した日研究生に対する全国アンケート調査では、修了研究・課題を今後どのように生かすかという質問に対して、「母国大学の卒業論文に発展させる」と回答した回答者は、回答者272名中100名で36.8%を占めていた。
- 14 本節で「アプローチ」と呼ぶのは研究方法と関わりのある高頻出語のことである。

## 参考文献

- 国際交流基金(2020)『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf> (最終アクセス: 2021/11/10)。
- 高木修・田中優・小城英子・太田仁・阿部晋吾・牛田好美(2011)「学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷—卒業研究のテーマ分析—」『関西大学社会学部紀要』42(2): 131-153。
- 丸野由希(2016)「卒業論文のテーマに何が選ばれてきたか—現代社会学部の卒業論文題目の語彙分析から—」『現代社会研究』19: 35-50, 京都女子大学現代社会学部。
- 森真理子・ルチラ パリハワダナ・平尾得子(2008)『日本語・日本文化研修プログラム 2007年修了時全国アンケート調査報告書』石田大成社。
- 森真理子・ルチラ パリハワダナ(2010)『日本語・日本文化研修留学生教育に関する全国的研究調査報告書』石田大成社。
- 文部科学省(2020)『2021年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生 日本語・日本文化研修留学生コースガイド』。
- ルチラ パリハワダナ・森 真理子(2012)「日研究生教育における課題研究の位置づけと役割—『2011年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生 日本語・日本文化研修留学生コースガイド』の分析を基に—」『京都大学国際交流センター 論攷』2: 91-112。
- Farmoush Pedrami, Pamela Asenso and Sachin Devi(2016) Using Text Analytics of AJPE Article Titles to Reveal Trends In Pharmacy Education Over the Past Two Decades, *American Journal of Pharmaceutical Education* 80(6): 104, <https://www.ajpe.org/content/80/6/104> 最終アクセス: 2021/11/10)。

# **MEXT Japanese Studies Students' Approaches to Japan and Japonology Research:**

## **An Analysis of Completion Research Titles of Fifteen Universities**

Ruchira Palihawadana\*

### **Abstract**

This study aims to reveal trends, approaches, and areas of interests of MEXT Japanese Studies scholars, by the way of analyzing their completion research titles using text mining analytics. The target of the survey consists of 969 research topics of Japanese Studies Students who were studying in 15 universities in Japan during 2009 to 2020.

Through analysis of frequency words, co-occurrence networks, related words and by applying collocation statistics and binary correspondence analysis we revealed that the main areas of research interests of Japanese Studies Students were Japanese language, society, culture, literature, and education. Most often Japanese language studies were carried out as comparative research between Japanese language and the mother-tongue of the researcher having linguistic expressions as the target. Another frequently appearing research style was awareness surveys conducted especially to young Japanese such as university students. Females, their images and status in society, translations and dialects were also in trend as research topics.

Furthermore, we analyzed how the variants such as nationality, the year when the research was carried out, and the affiliated university correlated with the frequency words.

**Keywords:** Japanese Studies Students, completion research, research topics, Japonology, text mining

---

\*The Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University